「子ども」と「おもちゃ」と「創造力」

（お茶の水女子大学附属いずみナーシング講演会より）

和久洋三

はじめに

僕は、東京の築谷に、平成元年に、童具館とい
う小さな建物を建てて、そこで子どもたちとか
わる場所をつくりました。それから小学校六年生
までの子どもたち百五十人くらいが通ってきてい
ます。また、子どもたちと絵を描いてくださいと
か、積み木遊びをしてくださいと、いろいろな幼
稚園や保育園に呼ばれ、全国を回って、子どもた
ちとかかわってもらいます。

子どもに秘められた力

最初に、これを読むと一目瞭然なのでお見せし
まずけれども、絵1は三歳児の子どもが描いた甘
食パンとメロンパンの絵です。（P9）。すこいで
しようと、色遣い、タッチ。あっという間に二十分
ぐらいで描いた絵です。絵2は四歳児のニワトリ
（P11）。そして、絵3は四歳児の、初めて絵らし
い絵を、描きたいと言って描いた、ミミズクの調
製です（P12）。こういう作品が次から次に、出

- 8 -
絵1 メロンパンと甘食パン・3歳児

実は、これらは一つ、秘密があります。絵の具がアクリル絵の具なので、速乾性がありま
す。今の普通の幼児用の水彩絵の具を与えていた
ので、こういう絵はできません。乾くのと、混
ぜていくときのころ合いが、ちょっとよい量の渾
色をつくって、色彩に幅を与えてるのです。僕が
度肝を抜かれるような作品ができ始めたのは、こ
の絵の具を与えてからです。幼児教育は、こうい
う一つの素材によって全く違う世界が聞けてくる
ということを、その時に感じました。
僕は上野の芸大の大学院を出ていま
すから、絵はヘタではありません。でも、くやし
いけれど、子どもたちにはかなわない。しかし、そ
ういう力
は、感動的なことでした。僕の指導があるからで
は、感動的なことでした。
何かをするためにには、いろいろな情報を駆使して想像するという作業が前提としてあります。しかし、この「想像力」の世界は客観的な評価ができない。記憶力の世界は情報が正しく理解されているかどうかの○×がつけられるので、教育はここが中心になって、肥大化していきわけです。そのため、「想像力」を前提にした「創造力」の世界はどんどん教育の中から欠落していいく。情報を頭に詰め込むことばかりが行われる。これが、教育の大きな問題点だと思われています。最近は、失敗することを怖れて、結局手を出さない子が多くいます。これは能力開発ができません。人に言われたことを言われた範囲でやっていくことが一番安全だと思うから、そういう生き方を選ぶでしょう。残念です。

しかし二歳児は、そこでは、「僕がやる」私に
活動衝動

その「これ何？」が四歳になると、「何で？」「どうして？」 急激な成長だと思います。

それでも、「何で？」「どうして？」に変わります。 「何で？」と「何で？」、「どうして？」に変わる。

一方、人間にとって、本当は大事な物事に因果関係があるといえど、念を押すことは大切であります。 知りたくて知りたくて、しょうがない生命であります。

みみずくの剥製・4歳児
知ることは「自由」につながっていきます。自由になるということは、やりたいことがやれるようになるということです。『これ何？』、『何で？』、『どうして？』という知的好奇心は自由を獲得するためには必要なのです。だから、子どもは何でもやってみた後に自分で身につけるとします。気づきが発見されることによって、新しい事態が生まれ、発見が収穫をもたらすのです。一番奥に活動が存在すると言われています。活動こそが、学びを生み出します。それによって人間はどのように自由になるかを学びていきます。これをやろうというときはどんどんと生むことができます。生命世界というのとは、一致するということによって豊かになるということです。一致することによって命がはぐくまれていきます。つまり、一致することによって生命は豊かになっていくのです。
自発性

二歳児が「自分で」というのは自発性の現れです。これがすべてのもので、自発性があるから自発性が出てくる。主体性が出てくるから主体性ができる。主体性ができるから自発性ができる。自発性というものは、「自分で」ですね。自主性ということは、自分から考え、自己を育てることです。

実は僕は、「こういった作品を作りたい」と思うと、企画の先生が、「指揮してほしい」と言っている。これは、指導ではなく、指導を求めていない。指導が必要なのは、基本的な技術の習得に限られている。子どもがが夢中になってしまい、指導が必要となる。これは、子どもが無我夢中になって、自力で考え、自分で考え、自分で考えることである。

今、僕たちはアートに指導に入っていて、あおじろ、こうしらをアートに指導に入りえない。
ちっと緊張感が弛緩した子、集中力が途切れたような子に、「おお、いいじゃないか、すごい！と言わなければ。そうすると子どもはその気になって、またやり始めます。これができるようになったのは、必ず子どもは世界なのです。やがて子どもは「できた」という快感を得ます。つまり、納得する答え自分まで探すのです。それが「答えがあるんだ」「見つけられるんだ」と思う休験になり、やがて答えが見つかるまでやめないようになります。では、どんな積み木を子どもに与えるかということ、答えが見つける活動ができるようなもので、それはどんな積み木なのか。

（講演）
平成十八年十二月九日